

親愛なる恵美子様

こうして真っ白な便箋に向かい、誰かに気持ちをしたためるなど、何十年ぶりでしょうか。口はわりと達者であるものの、筆にはあまり自信がありません。

それでも、口に託すといつものように冗談にしまいそうなので、あえて、こうして不慣れな筆にて想いを綴ることで、混じりっ気のない純な気持ちを伝えることとしました。

あなたとこの番組で共演をしてから、もう10年もの歳月が経つのですね。率直に言うと、番組初回から今日に至るまで、僕は圧倒されっぱなしです。

針の穴に糸を通すような的確でいて繊細なツッコミ、人生を歌い上げる豊潤な歌声、ゲストやスタッフへの気配り、そして、いつも先頭に立ち、番組を牽引していく姿勢。そのすべてに、です。

年端もいかない子供の頃から、芸能界という海原にお姉様と手をたずさえて飛び込み、その手が離れてからも、ひとり、険しい道を千里、万里と駆け抜けてきた、その凄みを、まざまざと見せつけられる日々です。

同じ芸の道に生きる者として、信頼と敬意を抱くばかりです。

いや、こういった機会なので、正直に伝えます。

僕はあなたに信頼と敬意、そして、好意をも抱いています。恋、というやつです。こんなことを言うと、「高田さん、それは老いらくの恋よ」と笑い飛ばすかもしれませんね。

それでもいいです。

あなたに笑ってもらえるなら、いつだって僕は道化を演じることでしょ。

それでもいいです。

波立つ海原の中、ひとり涙を隠してきたあなたには、もうずっと笑っててもらいたいから。

お嬢さん、いつもありがとう。そして、おつかれさま。

いつかふたりで、宵闇の大阪をそぞろ歩きたいものですね。

七色のネオンの中、これまでのこと、これからなことなど語らしましょう。

東洋のレオナルド・ディカプリオ
高田純次より